

### 滑稽俳句と俳号の謎(3)

#### 八洲忙閑

俳号には本名からの「もじり」が多く、それ自体が滑稽味に富み、次のような例がある。

◆発音から他の漢字に転換（大橋＝おおはし→桜坡子＝おうはし）◆読みを入れ替え（貫二＝かんじ→瓜人＝かじん）◆読みのなぞり（登＝のぼる→野風呂＝のぶろ）◆イニシャルを漢字に（I・O＝あいおう→愛桜＝あいおう）◆読みを二分して合体（新比古＝ちかひこ→誓＝ちかひ・子＝こ／誓子）など。

一方、数多の漢字の中から好みの字を選んで命名したものや、先人の号の借用や故郷に関係する来歴、地名・景勝とか、歴史上の人物、故事成語、古典芸能、名数、色の和名などや、無論、季語から取ったものなど多岐にわたる。異色な例では、五行納音（ごぎょうなっちん：生まれ年による運命判断の一つ）によるものも。荻原井泉水は一八八四年、甲申の年生まれからという。

俳号にまつわるエピソードは、俳人その人の志や信念、願い、趣味・嗜好、他人からの示唆・・・などが秘められている。中村草田男を例に挙げてみよう。若かりし頃、ある親戚が、「お前は腐った男だ」と面罵したことから、確かにそうかもしれないが、「そう出ん男だ」と開き直った。「くさった男」と「そうでん男」と音訓双方の読みから付けたといわれる。

萬緑の中や吾子の齒生え初むる 草田男

「万緑」という季語は、この草田男の句によって定着したとされる。本来、季語ではなかった言葉を歳時記に載るまでに高からしめた、そのこと自体が画期的なことで、多くの俳人の共感を得た。自然界の営みの中、自身の子どもの歯が生え始めたことと対比させ、実に俳諧味のある一句ではあるまいか。

万緑や死は一弾を以て足る 五千石

草田男を嚆矢とする「万緑」。<その草田男に「五千石」はいい名だと言われたので、草田男公認を誇りに五千石で通した>（松尾隆信氏）。一発の弾丸によって人間は死ぬ—生死を分けるであろうことを端的に表現。諧謔に富んだ警句でもある。

いつからの一匹なるや水馬

右城暮石

暮石（ぼせき）の俳号は、生地の小字「暮石（くれいし）」から「ぼせき」と音読にしたことで、“墓石、（はかいし・ぼせき）と誤解される恐れがなきにしもあらず。しかし、<将来一旗揚げてふるさとに戻りたいとの思いからだろう>（茨木和生氏）というのは間違いなさそうだ。あめんぼうがいつから一匹でいるのか？ 誰しも及びもつかぬ発想、そこにおかしみを覚える。

失語して石階にあり鳥渡る

六林男

<六林男はムリオと読ませる積りらしいが、随分無理な読ませ方だ>と西東三鬼が六林男の句集『荒天』の序文に書いている（久保純夫氏）。掲句は言い違いして恥をかいたものか、その場を離れて石段に上った。ちょうどその時、鳥が北へ帰るところであった。何か救われたような、恥を雪いだような気がした、と滑稽味をもって一句をなした。

ところで、男子の俳号には虚子に代表されるように、「子」を名乗る人が多い。読書子、編集子など動作性を示す名刺に付けたりするが、子規にはかつて虚無子、放浪子の二号があったそうだ。秋櫻子、誓子、桜坡子、眸子、零余子、春眠子、風人子...など無数にある。女子の場合、千代女を筆頭に久女、真砂女、かな女、汀女、波津女、風女、琴線女、多希女...など、「一女」が歳時記に載っている。

「滑稽俳句と俳号の謎」として書いてきたが、謎の核心に迫るには些か紙幅が足りないまま、今回最終回を迎えた。初回で、『月刊俳句界』が俳号の特集を組んだことを書いたが、今回同誌の一部を参考にした点、お断りしたい。

（完）